

全校研究「地域と協働」グループまとめ

I 1年次の取組

はじめに、これまでの各学部の地域と協働した授業実践について整理を行った。その中で、中学部と高等部で一事例ずつ実践を行うこととした。地域と協働した授業実践を通して、中学部では生徒の学習意欲の向上や地域の他者とのつながりを広げたいと考えた。高等部では地域の資源や人材を活用した作業学習、製品作りの授業実践を進め、生徒の学習意欲の向上とより品質の高い製品やサービスの提供につなげていきたいと考え、実践した。

II 1年次の実践

1 実践概要 ※詳細は「実践まとめシート（1年次）」参照

中学部

実践	中学部における「紡績作業を通した地域と協働した作業学習」の実践
学 習 活 動 の概要	<p>対象：中学部作業学習農工班の生徒（1年2名、2年3名、3年3名）8名</p> <p>10月19日：事前アンケートの実施</p> <p>1月26日：附属小学校での交流及び共同学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・附属小学校の教育課程上の位置づけは総合的な学習の時間 ・作業学習の時間に生徒が担当している仕事内容で綿繰り班、搾油班、紡績班の3グループに分かれて交流及び共同学習を2時間行った。 <p>1月28日：事後アンケートの実施</p>
分析方法	<ul style="list-style-type: none"> ・交流前後の生徒へのアンケート調査結果の比較 ・生徒の交流時の生徒の発言内容や行動の見取り、授業中のエピソード記録 ・交流後の附属小学校の児童の感想の検証
結果	<ul style="list-style-type: none"> ・事前と事後を比較するとより具体的な内容の作業目標を記述する生徒が増えた。 ・相手に分かりやすく伝わるように意識して作業に取り組んだ様子が見られた。 ・相手に応じた説明の仕方や関わり方について、気が付いたことや次に教える機会があれば、どのようにしたらよいかがアンケートに記述されていた。 ・交流をした児童の感想では、本校生徒の教え方や関わりを肯定的にとらえた記述が多くあった。

高等部

実践	高等部における「生徒たちがプロデュースした地域の中にある作業学習」の実践
学 習 活 動 の概要	<p>対象：高等部作業学習サービスチーム調理班の生徒（1年2名、3年1名）3名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外部講師（カフェ イリス）による授業 <p>10月7日：りんごを使用したオリジナルスイーツの考案や助言</p> <p>11月14日：考案したスイーツの調理指導</p> <p>1月30日：ラッピング方法の検討</p>
分析方法	<ul style="list-style-type: none"> ・ビデオの映像記録とICレコーダーの音声記録の分析 ・生徒の作業日誌の振り返り ・外部講師の感想の検証
結果	<ul style="list-style-type: none"> ・専門家から直接助言を受けることで、生徒たちの技能の向上と自信が高まった。

・地域の人に、本校の生徒の特性などを知ってもらう機会となった。

2 考察

中学部は作業学習で取り組んでいた綿の紡績・搾油活動を行い、そのやり方を他者に教える場を設定することで、生徒の作業意欲を高め、地域（他者）とのつながりの拡大を図るなどの成果を得ることができた。他者に自分たちの行っている作業を教えることで、人との関わり方の幅が広がり、「分かりやすく作業内容を説明するにはどうすればよいか」など、相手を意識した話し方を生徒自身が考えるきっかけとなった。また、交流後のアンケートや感想から、作業学習への意欲が高まったことや他者へもっと伝えたいといった意見が多かった。自分たちが作業学習で学習してきたことを、他者に伝える活動は、生徒が感謝や称賛を受けることで自信になり、生徒が普段の作業学習への達成感、充足感を感じ、それがより作業学習への意欲を高めることにつながったと考える。今後は、地域の人たちへの販売機会を拡大したり、地域の人たちへ教える機会を継続したりして、地域の人と関わることで、人間関係の基盤を作り、自分の思いをさらに表現できるようになっていくのではないかとと思われる。

高等部はカフェ イリスから招いた講師との3回の授業の中で、「生徒と地域の人との間に関係性が築かれる過程」が見られた。渡辺(2017 pp.37-38)は、『地域協働の活動が生徒のキャリア発達を支援していると評価した根拠は、地域の人や仲間を通して、短時間の間でも、地域の人との関係性を育てることで、生徒一人一人が自己肯定感、自己尊重感を深めていると評価できる行動をしていたことである』として、『生徒と地域の人々との間に関係性が築かれる過程は、同時に、双方が共に自己有用感と自己肯定感を高める過程であることに気付かされ、そのような発達体験の機会を作った地域協働という取組の意味を実感できた』と述べている。このことから、協働の機会（回数）は複数回が望ましいと思われる。今後の課題として、地域協働による生徒の変容を、発言や行動、振り返りの場面を通して丁寧に見取ること、地域の人々の意識の変化を半構造化インタビューなどによって明らかにしていくことが挙げられる。

Ⅲ 2年次の取組

1年次の地域と協働した授業実践を発展させて、中学部と高等部で一事例ずつ実践を行うこととした。地域と協働した授業実践を通して、中学部では作業学習そのものへの意識を高め、地域（他者）とのつながりを拡大し、さらには他者へ伝える力の伸長を図りたいと考えた。高等部では、地域の方から教えてもらう機会を設定することで、高等部生徒たちの学ぶ意欲がより高まるのではないかと、また同時に、地域の方の特別支援学校や生徒の印象、意識が変化するのではないかと考えた。

Ⅳ 2年次の実践

1 実践概要 ※詳細は「実践まとめシート（2年次）」参照

中学部

実践	藍染めワークショップを開こう
学 習 活 動 の概要	<p>対象：中学部1年生2名、2年生2名、3年生2名の6名</p> <p>6月7日：染色についての調べ学習</p> <p>6月13日：外部講師から、藍染めのやり方や模様の付け方を習う（講師：弘前大学教育学部 勝川健三氏）</p> <p>6月20日：藍染めを実践する。小学部児童への藍染めワークショップを開くことを知る</p> <p>6月22日、23日：模様の付け方を相手に教える練習。役割分担。伝え方の練習</p> <p>6月27日：小学部児童を対象にした藍染めワークショップ①</p>

	<p>振り返り。附属幼稚園園児への藍染めワークショップ②を開くことを伝える</p> <p>7月11日：附属幼稚園園児を対象にした藍染めワークショップ②</p> <p>7月12日：藍染めワークショップ②の振り返り 単元を通して学んだことをグループでまとめる</p> <p>7月14日：発表、質問をし合う 発表についての振り返り</p>
分析方法	<ul style="list-style-type: none"> ・授業後の生徒へのアンケート調査結果の比較 ・生徒のワークショップ時の生徒の発言内容や行動の見取り ・単元内での生徒の言動の変容、授業中のエピソード記録などの検証
結果	<ul style="list-style-type: none"> ・外部講師の方に藍染めについて教わり、よい藍染めを目指すという点で、地域と協働することができた。また、同じ中学部の生徒同士や、協力的な方など、近い関係性の人たちと協働することで、自分の力以上の成果や気づきを得ることができた。 ・ワークショップの予告をきっかけとして、地域（他者）への視野が広がった。 ・授業の振り返りと対話をとおして、相手の身に立って考える様子や気づきが見られ、生徒の伝える力の幅が広がった。

高等部

実践	高等部における「生徒たちがプロデュースした地域の中にある作業学習」の実践
学 習 活 動 の概要	<p>対象：高等部作業学習プロダクトチーム木工作业班の生徒（1年1名、2年2名、3年2名）5名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外部講師（木村木品製作所）による授業 <p>7月12日：木村木品製作所の紹介、りんごの木のバターべら製作</p> <p>7月14日：普段の作業学習での作業へのアドバイス</p> <p>7月19日：新しい木工製品の検討</p> <p>8月28日：3回の授業の振り返り</p>
分析方法	<ul style="list-style-type: none"> ・ビデオカメラで授業を撮影し、生徒の様子を観察 ・生徒の授業での発言をICレコーダーで記録し、作業日誌の振り返りの記述とともに分析 ・3回の授業後に、生徒たちと授業の振り返りを行うとともに、外部講師にインタビュー ・昨年度3回の授業をしていただいたカフェ イリスからの外部講師にもインタビューし、二人のインタビューを比較して、分析
結果	<ul style="list-style-type: none"> ・木村木品製作所からの外部講師の3回の授業の振り返りで、「これからどんなことをがんばろうと思いましたか」という問いに対する生徒たちの回答で、それぞれの生徒が「〇〇をがんばりたい」、「できたことを他の製品作りに活かしてみたい」という「思い」が見られ、学ぶ意欲の向上やその後の作業への向き合い方に変化が見られた。 ・二人の外部講師へのインタビューに対する回答から、生徒たちに対する印象は「素直」、「集中」、「真剣」、「参加」、「敬意」という言葉がキーワードとして挙げられ、最初の授業から積極的に学ぼうとする良いイメージであった。通常の学級の子供たちと比較して、「変わらない」、「同じ」と話し、本校生徒と授業で関わることによって、このような印象をもたれたと推察される。本校の生徒と一緒に製品を創り出そうという意識を読み取ることができた。

2 考察

中学部では、今回の取組みでは、中学部生徒と地域との協働は難しかった。これは、生徒の地域とのつながりそのものがまだ狭いためと考える。

菊地（2021 p.15）は、次のように述べている。『地域協働活動は、活動そのものに着目しがちであるが、生徒が豊かな体験を振り返り、「対話」することによって確かな「経験」につなげていくことが肝要である。これらの取組では、職業技能等の向上や目的意識の醸成だけでなく「振り返り」を通して相手の身に立って考えることや、誰かの役に立つ喜びを実感すること等の他者意識や人間関係の形成を重視するようになってきている。なお、このような場の共有は、関わる側にとっても障害等への理解促進が図られ、見方や意識が変容するなど、双方のキャリア発達の促進につながり、共生社会の形成に資するものとなってきている。』

地域を広げていくためにも、地域とつながる学習を継続し、少しずつ社会とつながり、将来の生活につながるような生きて働く地域としていけるように進めていきたい。

本実践の工夫点として、以下の2点が挙げられる。

（1） 外部講師の活用、学習内容設定の工夫→主体的

- ・外部講師選定の工夫と事前の十分な打ち合わせを行った。外部講師は本校生徒について十分理解のある方を選定し、事前に今後の展開の共通理解、当日指導してほしい内容、取り入れてほしい説明内容、使ってほしい教材などについて十分な打ち合わせを行った。
- ・普段作業学習で取り扱っている藍染めを入口として新たな学習を展開したことで、生徒の意欲を引き出した。
- ・学習内容を段階的に高度化したことで、自信をもって新しい学習でも臨むことができた。

（2） 生徒同士の対話を通した振り返り学習の設定→対話的

- ・対話で伝わることや適切に説明すると相手が理解するという成功体験を積んだことで、適切に伝えようとする意欲を高めることができた。

以上によって、生徒の主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業となり、生徒のキャリア発達を促進することができたと考える。

高等部では、地域の方から教えてもらう機会を設定することで、高等部生徒たちの学ぶ意欲がより高まるのではないかと、また同時に地域の方の特別支援学校に在籍する生徒への印象や意識が変化するのではないかと考えた。

木村木品製作所からの外部講師の3回の授業の振り返りで、「これからどんなことをがんばろうと思いましたか」という問いに対する生徒たちの回答で、それぞれの生徒が「〇〇をがんばりたい」、「できたことを他の製品作りに活かしてみたい」という「思い」が見られ、その後の作業への向き合い方に変化が見られた。

菊地（2021 p.10）は「できるようになりたい」、「いまはできないけれど、他のできることをがんばりたい」、「できたことを〇〇に活かしてみたい」といった「思いの変化」や「内面の育ち」がキャリア発達といえると述べている。キャリア発達は「本人のなかで起こる（意味付け）」ということや「他者との関係性（価値付け）」を通して大事なことに気付いていくということも述べている。

加えて、菊地（2021 p.12）は、授業において生徒が「できる・わかる」ために、教師は生徒が感じたことを価値付けていく必要があり、とらえにくいものほど問い掛け、やりとりすること、教師と生徒、生徒同士が互いに考えや気付きを共有していく過程が必要となると述べている。

このことは、地域の方から教えてもらう機会を設定するだけでなく、その後の対話や振り返りが重要となることを示している。教師は、地域の方からの教えやアドバイスで生徒が感じたことを価値付けていく必要があると考える。

二人の外部講師へのインタビューでは、「全く関わらずイメージで思われるよりは、実際に会って関わり、体験してもらった方がイメージは変わってくる」という回答や、「地域と継続して関わる方が成長は分かりやすい」という意見もあった。このように、地域の様々な人とつながる学習場面の設定の大切さや、地域の方と協働して授業する回数を適切に設定していく必要性が確認された。

V まとめ

本実践のまとめとして、以下の3点を挙げる。

① 地域と協働することで、相互のキャリア発達が期待される。

中学部の実践では、普段担当している仕事を教えるという活動や藍染めワークショップを通して、生徒たちが振り返りや対話をする中で、相手の立場に立って考える気付きや誰かの役に立つ喜びの実感を得ることができ、本人の意識の変化や意欲の向上につながった。高等部の実践では、地域の専門家に普段の作業の様子を見てもらってアドバイスをいただいたことで、生徒たちが教わったことを意識しながら作業するなど、その後の作業の向き合い方に変化が見られた。また、授業後の地域の専門家へのインタビューから、本校高等部生徒の積極的に学ぼうとする姿勢が、「素直」、「集中」、「真剣」、「参加」、「敬意」という良いイメージにつながったのではないかと推察された。

② 対話することの重要性が確認された。

教師と生徒または生徒同士が授業を振り返り対話することで、生徒本人の気付きを促すことにつながるとともに、教師にとっては生徒の思いの変化や内面の育ちをとらえることにつながる。地域の方との対話により、生徒たちは学校で学んでいることや体験したことの意味や価値に気付くことにつながるとともに、教師にとっては授業の充実や改善につなげていくことができる。定量的にとらえにくい側面はあるが、時間の流れを踏まえ、対話という相互作用に着目し定性的にとらえるなど、丁寧な見取りの重要性が確認された。また、課題としては生徒の学びや変容の見取りの難しさが挙げられる。

③ 地域の方を外部講師として活用する方法は様々であるが、生徒が身近に感じることを入口として、新たな学びに主体的に取り組むことを大事にしたい。

中学部の実践では、外部講師と協働したことで、次の学びへの意欲付けとなり、他者へ伝える力を伸ばし、地域の中で多様な他者と関わるための基礎を作ることができた。高等部の実践では、自分たちが作った製品を地域の人たちに販売したいという「思い」を共有し、地域の方と協働して製品開発するための関係作りや土台作りをすることができた。

今後も地域と協働する授業実践を継続し、本校児童生徒のキャリア発達支援を行っていきたい。

【引用・参考文献】

- ・渡辺三枝子（2017）「関係性を通したキャリア発達支援を考える」『職業学科3校合同研究実践事例集—地域と共に進めるキャリア発達支援』京都市立総合支援学校職業学科編著，ジアース教育新社，pp33-40.
- ・菊地一文（2021）「新学習指導要領とキャリア教育の充実」『小学部から組織的に取り組む「キャリア発達支援」の実践』千葉県立夷隅特別支援学校編著，ジアース教育新社，pp8-14.
- ・菊地一文（2021）「特別支援学校におけるキャリア教育の進展」『知的障害教育における「学びをつなぐ」キャリアデザイナー—本人の「思い」や「願い」を踏まえた「深い学び」の実現に向けて』全国特別支援学校知的障害教育校長会編著，ジアース教育新社，pp8-19.